

O S S の生活史

第十篇

面倒くさいことは省いてやりましょう

語り手＝羽鳥健太郎

聞き手＝大川貴久

2026-09-05 76分07秒

十

面倒くさいことは省いてやりましょう

語り手＝羽鳥健太郎

聞き手＝大川貴久

2026-09-05 76分07秒

——まず最初に、皆さんにお聞きしていることなんですけど。最初にパソコンに触った時のきっかけとか、パソコンに触った最初の頃っていうのを、いつだったか覚えてらっしゃいますか。

僕はね、八ビットなんですよ。最初にパソコンというものを触ったのは、八ビットだから、FM-8。富士通のFM-8っていうのを初めて触りました。その後、パソコンっていうのは、そうですね、PC-98とか、エプソンのPC-98の互換機、という時代ですね。いわゆるパソコンというものに触ったのは。

——おいくつぐらいの時だったっていうのは。

それはね、二十四か五ですね。

——じゃあ、もう社会人としてってことですか。

いやいや、僕、社会に出るの遅いんですよ。二十六の時に社会に出たんで。

——ですと、学生さんの時に初めて触られて。

そうですね。そうですね。ちょっとプロフィールのほうに書かせていただきましたが、物理学科に入った時に、データを取りまとめるのに最小二乗法をBASICで作ったっていうのが最初です。

僕が入った頃ってまだ、もちろん八ビットだから、パソコンなんて発展途上で。基本はメインフレームなんですよ。技術計算っていうのは、メインフレームのFortranという言語でやるっていうのが当たり前の時で。メインフレームと並行してパソコンを使った、って感じですかね。

——そこで初めて触られたのがきっかけで、そういったところにパソコンとか、そっちのほうに触られるようになったっていうことだったんですか。

仕事で、原子力。原子炉の安全解析をやった時、当然メインフレームでやってるんですけども、一部のモジュールって、自分の家でも書いて試したいっていう時に、結局、ソフトウェア買わないと何もできない、という状態だったのが、嫌だったなあっていうのは覚えてます。

だから、当時はBASICで自分で作るか、それとも、なかったらソフトウェアを買うかの選択肢は、二つに一つだったんですよ。あとは先輩から教えてもらおうとか、過去の試算を横展開。ソフトウェアの横展開っていうものがないですから。当然、まだインターネットのない時代ですから。

そういうところで、何をやるにもお金が必要なんで。人のソフトウェアがどういうふうに作ってるのかなっていうのを見てっていうのは、なかなか難しかったんですね。

そんな時に、ちょうど。まだLinuxがない時代です。BSDで、大学に入ってるのって結構フリーになってて。フリーソフトウェアはあったのか。リチャード・ストールマンはもう出てきてる頃で。当時だとしたら、海外っていうか、アメリカからCDを取り寄せて、そこでいろいろなソフトウェアを。当時は無料で、CDを買うだけで見ることができると、いう形で。

当然、仕事はFortranなんですけど、f2cってあって、FortranをCに直すっていうツールがあったんですね。それでFortranをエディターで書いて、それでコンパイルして通して、ああ、ここは動くとか、そういうのをやってました。

で、だんだんそれをやってる時に、自分でも。まだNetBSDとかFreeBSDが出る前の時代ですね。BSD 4.2とかBSD/386とか、そういう時代で構築してて。

一回目の転職をした時に、会社のデータをネットワークで繋げたいっていうんで、じゃあ僕やりますって言って、BSDでネットワークを組んだ。っていうのが、どっぶり使うきっかけでしたね。

その後にパークレーに行った時に、BSDでやってたもんですから、本場のBSDが見れるって言って行ったら。パークレーの中でBSDを使ってる人は誰もいない。

——そうなんですか。

そうそうそうそう。なぜなら、学生は学割でSolarisを格安で買える。二割か三割で買えるんですよ、当時の価格で。だから、そんな不完全なもの、誰も使わないって言われて、すごいショックを受けてですね。

で、その時に、Walnut Creek CDRom Shopっていうのが、結構バイエリアで有名な、CDをいろいろ作って配布しているところで。僕は日本にいる頃から、そこに通販で買ったりとかしてたんですね。で、そこに行って、本当にBSDってどうなの、って話したら。その社長が、ちょうど、米軍にいた時に横須賀に駐留してたんで、日本から来たのかって、すごく歓待してくれて。

いろいろ話をして。だがBSDって、イケてないよと。バイエリアでも最近は全然使われてないよね。BSD関連のソフトウェアとか、CDで作っても、まあ、ちょぼちょぼだよと。で、あともうちょっとしたら、もっとイケてるのが出るんだって言って。で、まだ発売前なんだけど、せっかく訪ねてくれたんだから、これ売ってあげるよって言って。

当時、百。今にして思えばね、結構高いなあと思ったんだけど、百ドルで、Linuxの〇・九九だったかな。それを手に入れたんですよ。それがね、ディストリビューションはYggdrasilっていう、北欧の女神の名前がついたディストリビューションで。結構スクリプトとか組んであって、デモみたいな形になってるんで

すね。✕も当時からありましたから、✕が立ち上がって、スクリーンで虎の絵を描いたりとか、そういうやつで。

でもね、最初、戻ってきてから BSD で本格的にネットワーク組もう、っていう話になってたんですけど。その頃は Linux なんて全くネット全然使えないで。とりあえず BSD で組んで、組み終わってから少し経ってから FreeBSD になったのかな。

で、その頃に僕、社会人大学院に行つて。その時に、Linux っていうもんだよっていうのを、結構いい先生がその大学院に揃ってたんで、いろんな人にいろいろ教えてもらつて。本格的に、さらにズブズブになっていったっていうか。

——それで言うと、お仕事のほうでやられてた、もともと。

そうそうそうそう。仕事に何とかシステム利用できないかっていうのが、始まりです、僕は。だが、昨日書いてて思ったのは、何かしら、何かで繋がってるなっていう感じは思いました。

——最初は技術計算のところから、お仕事で原子炉のところで作られていった。それで。

で、それでネットワーク構築が仕事になって。でまだね、IOBASE-T っていうか、その、今使われてる、あの電話みたいな端子ではなくて。同軸ケーブルで繋がっている頃の世界で。ネット

ワーク繋がる時に、同軸ケーブルのハンダ付けとか、会社中のありましたもん。

——本当に、物理から。

そうそう。でまだね、みんな、踏むのはまだいいんだけど、足に引っ掛けて、それが抜けて壊れるんで。もう泣きました。

——今じゃ考えられないですね。じゃあ、もうそういうレイヤーから、ソフトウェアのところまでやられてらっしゃって。現地に行かれて Linux を知ったっていうところがあつたんですね。

そうです。そうです。BSD と Linux、ずっと並行してやって。えっと、今もそうなんですけれども、小江戸らぐのサイトの OS は FreeBSD です。みんなに、ひねくれものって言われてます。

——実際 Linux とかに触られるようになって、お仕事もそれで変わられたりとか、それこそコミュニティの活動とかもされるようになっていった。

えっと、Linux をやってたから仕事変わった、っていうよりも。大学院終わった時に、いろいろお世話になってる大学の先生から、「今の会社においても君が大学院で学んだものはここでは発揮できないから、転職したほうがいいよ」って言われて。違ふと

を紹介してもらって転職した。ところが、GISの会社だったんですね。地図の会社で。

ところが地図って、実は知財権がガチガチに固められているところ。オープンソースなんて、今でこそオープンソースと組み合わせてうまくやるっていう時代なんですけれども、当時はオープンソースは敵だっていう、マイクロソフトと同じようなところ。そこで、会社とは別に、細々とやってたっていう感じですね。

で、アメリカから帰ってきた時に、Tokyo Linux Users Group でずっと英語で活動してたんですけども。やっぱり意思疎通ってうまくいかないよなあ、とか。何ともうちよっと思疎通ができていいとこないかな、とか思ったら。埼玉西 Linux 研究会って作ります、っていう人がいて。じゃあ僕も参加しますって言うって。

で、今でも覚えてるんですけど、最初の待ち合わせは、池袋のビックカメラの前。で、おじさんたちがわらわらと集まってきた、十人ぐらいだったかなあ。

それで、月一回の勉強会をいろいろしていった。徐々に十人が二十人、三十人近く行く時もあったかな、ぐらいいなあって。その時って結構、各地域に、ちよとど地域 Linux ユーザーグループっていうのが、千葉にできたりとか、大阪にできたりとか、いろんなところにちよとどできたりとか、できたんですね。

その主催の人が、ちゃんとした組織にしたい、って言って。組織を固めようって言った時に、僕は、そうじゃなくて、本当に知識の勉強の場であればよかったんで。そんなの、ずっと下働きっていうか、面倒くさいこと全部やってたんで。その組織化するっていうのも、また俺のところ以降ってくると思ったんで、絶対やだって言うって。そんな面倒くさいことやるんだったら、僕はもう辞めるって言って、辞めて。

そしたら、そんな中の何人かが、ハトちゃん、そんなこと言うんだったら自分の楽な方法でやればいいじゃん、って言うって。それで、小江戸らぐを作ってみたんです。

——それで言うと、最初に Tokyo Linux Users Group だったりとか、そういうところに入られてたっていうのは、もともと勉強というか、ご自身の知識を得たりするためっていうところが、やっぱり大きかったってことですか。

そうそう。で、そういうのが、サンフランシスコとか、ベイエリアでは当たり前にあって。そこはね、ネットワークじゃなくて、当時は新聞で募集が出たんですよ。

新聞で、何面にもわたって、こういうユーザーグループを作りました、募集します、っていうのが。それこそね、日本では三行広告みたいな形で出てるわけで。もちろん Windows だけじゃなくて、Mac のほうほうをやりたいたとか、Windows のそのネ

ットワークだけをやりたいとか、サウンド関係で何かやりたいとか。そういうのが、うわあって出てて。

僕はそういうので、当然、日本にもそういう文化なかったんで、びっくりして。で、ただ、その前に、日本って、BBS って知ってますか。

——あ、はい、もちろん。

その、BBS。富士通とか NEC が、BIGLOBE とか。富士通は何て言っちゃった、忘れちゃったなあ。売り渡しちゃったんだもんね。ただ、僕は日経新聞がやってた日経 MIX に入ったんですよ。MIX ね。日経 MIX。で、これが結構コアなもので。そこで僕は BSD のソフトウェアをもらって、インストールしたの。えっとね、CD じゃなくて、当時はまだ CD もなかったんで、フロッピーディスクを、二十枚ぐらいだったかな。二十枚ぐらいで、宅配で届くんですよ。

——へえー。

で、それを使ってインストールして、次の人に渡すんですよ。そう、そういうことをやってたんですね。で、それもあるなあ。

——そういうのが下地で、そういうところに。

そうそうそうそう。あの、よかったのは、自分の欲求と、当時の文化的素地が、同時に、こう、少しずつ種を撒いて芽が出るっていうのが、同じぐらいの速度で進んだのが。僕にとっては楽でしたね。

——じゃあ、もうご自身に関わりやすいように関わられてるところがあつて。

当然ね、日経 MIX には、その当時の大御所さんっていう方もいっぱいいて。なんですけど。それとね、インターネットは大学にいないともう入れない時代だったの。僕、一番嬉しかったのは、社会人大学院になったらインターネットに入れるっていうのが。

——そうだったんですね。

うん、そうそう、それ一番嬉しかったですね。ただ、それがさ、結構お粗末で。大学間って、ネットニュースが当時の情報源だったんですけれど。夏休みって、みんなメンテナンスしなくなるから。上流の大学がまずネット落ちるでしょ。データがいつぱい来ちゃって落ちるんですよ。溜まったままで流さないから。

そうすると、上流の大学の人が、そのシステムを直します。直す、データが次の下流の大学に流れるから、その次が突然データがいつぱんに来て落ちる。って言うんで、一、二ヶ月ね、休み

が終わるとね、動かないっていうのが普通でした。おおらかでしょ。

——そんなことあるんですね。そんなに長い時間落ちてたら大問題です。

そうそう、大問題で。当時は、そのインターネットを使ってる研究室も、今もそれ残ってるんですけど、徒弟制度なんですよ。それで、大学のシステム、BSDのシステムを身につけていくっていうのが多かったですね。Linuxみたいな自由な雰囲気はなかったですね。徒弟制度ですから。

——確かに、そうですね。っていうところで、大学で学ばれたのと、また別に、Linuxの、実際のオフな場所に行ったりっていうのは、そういうことがきっかけだったりとか。

そうですね。その自由な雰囲気が好きでしたね。怒られないし。ネットニュースなんかでも、日経MIXなんかでも、書き方で怒られて。何やるんでも怒られるんですよ。それ、嫌でした。何て言うの、お作法がなくていい、と。まあ、当時にしては失礼だったとは思いますがね。お作法を知らなかったから。

——なるほど。そういったところで関わっていらっしやって、結果として新しいらぐを作られるっていうところに至るっていう。

そうそうそうそう。それと同時に、その、GISの、パスコっていう会社なんですけど。聞いたことあると思いますけど、パンの会社じゃないからね。そのパスコからIPAに出向するんですよ。

で、出向している最中に、日本政府もオープンソースにいろいろやらなければいけないみたいな話が出てきて。その時に、IPAでもやりなさいっていうのが経産省から来た時に。そもそもIPAの人、オープンソースのおの字も知らないですけど。オープンソースって何だ、何だって。そういえば羽鳥が、そんな活動なんかもやって。僕、言ってたから、ちょっと聞きたいって言うって。上のほうの人に呼ばれて。オープンソースソフトウェア事業っていうのを作ってた、って。

あれはね、ウィキペディアにも載ってます。オープンソースソフトウェア事業って。後で見えてみてください。

——実際IPAがやられてる事業で、いろんな成果物としていろんなものがあって、っていうところですよ。

はい。でも、あれね、いけないのはね。IPAの人がほとんど使わないんだよね。僕はIPAの人こそLinux使ってみたいなと思ってたんですけど、上の人には、その意見は極端だったというふうな話で、怒られましたけどね。

でも僕、今でも、デスクトップLinuxの日本語変換は、その当時作ってくれたvimを使っています。軽いやつが、vimの、

Anthy っていう。使わせていただいでるんで。まあ、メンテナン
スは結構遅いですけども、それなりに、まだ今でも動いてくれ
るんで、便利に使ってます。軽くて。

——実際、オープンソースソフトウェア事業としていろいろやら
れてたっていうのも、ご趣味でやられてるじゃないですけど、そ
ちらもありつつ並行してやられてたってところで。

はい、そうですね。プライベートと仕事が平行で動いてた。
で、もちろん、プライベートで会ってる人と、仕事で会う人が同
じだったりとかするし。何か委員会立ち上げるんでも、プライベ
ートでいろいろ会ってるから、じゃあ、あの人のつてを辿って、
あの人を紹介してもらおうみたいなこともできたし。便利でした
ね。

——それで言うと、いろいろやられていくっていう中で、プライ
ベートだと、それこそ小江戸らぐとかを立ち上げられてっていう
ところがあった。そういったものを立ち上げられた経緯として
は、どういうところだったんですか。

小江戸らぐは、もう、それは本当に、純粋に、勉強会をやって
飲みたい。そういう場が欲しい、自由に語れる場が欲しい、って
言うんで。ただ、埼玉西 Linux 研究会でやってて、面倒くさか

ったんで、なるべく面倒くさいことは省いてやりましょう、みた
いなことを考えてて。

だから、僕がやるのは、毎月、会議室を確保しますっていうこ
とと、夜の飲み会を決めます。で、募集します。当時はまだ
compass ありませんでしたから、メーリングリスト作って、そ
のメーリングリストにそれを投げる。で、みんなそのメーリング
リストに返して、僕、来ますっていう人はそれ書いていくみたい
な。やってて。

で、そういうふうな形で。でも最初はね、四人とか五人ってい
うのが、半年以上続いたと思いますよ。ただの飲み会じゃんみた
いな話。

ただね、今、結構人数減る時もあるんですけど、そこまでひ
どく減らないし、二十人ぐらいは毎回来てくれるんで。だから、
その時の経験があると、結構強くモチベーションを維持できま
すね。

やっぱりね、集まる場って、オンラインになったとは言え必要
だなって。まあ、結果的にはそんな感じで思いましたね。

で、当時も、ちゃんと勉強会をするっていうところっていうの
が、あそこだ、YJUG が。横浜 Linux ユーザーグループという
のがあって。これは吉岡さんっていう人がやってたんですけど
も。これはもう、プロフェッショナル集団の人たちで、むちゃく
ちゃ敷居が高いんですよ。ちゃんとしたものを、一回で二題ぐら

い。四時間の間に二時間、二時間やるみたいな。結構その、大学の授業っぽくやるみたいないな感じで。これは結構しんどい。

だから、もっと緩くやりたい。その、エントリーする人が、初めて来る人が、ビビらないような。気軽に入ってきて、あ、じゃあ、こんなんだったら僕も何か発表してもいいかなっていうような会で勉強会をしたいというのが、僕はすごくありました。エントリーレベルのものが結構少なかったんですね、当時は。

——以前のところとかでも、要するに勉強会の形として、緩いというか、頑張らないというか。そういう形のついでところやってらっしゃって、っていう。

そうそうそうそう。で、それで、失敗して。成功して、こんなができるんだぜ、すげえだろ、っていうネタもありますけれども。ここまでできたんだけど動かない、どうしていいの、助けてっていうネタも入って。そうすると、みんながああでもないこうでもないって、自分の経験したことを話してくれたりとか、聞いた話を伝えてくれたりとかするんで。場も盛り上がるんですよ。一方通行にならない。結果論ですけどね、それね。今に思えばね。

で、それやって、そしたら、友達の一人在、これ、そのままにしておくのもったいないから本にして作ろうよって言ったのが、LinuxUSERだったんです。

しかも、LinuxUSERって、僕、最初ね、まあ、その頃はもういい大人ですから。コミケって、あの、変な人が集まるところだと思ってたの。まあ、そうなんですけど。

だから、これ本にしてコミケに出そうよって言われた時に、あんなところ、やだよって言って。ちょうどね、なんか爆発物を置いたとか、そういうニュースが流れてるような頃だったんで、絶対嫌だって言ったんですけど。そういうところもあるけど、絶対誤解だって。あれはあらゆる同人誌の人たちが集まって、俳句集やなんかを出してるおじいちゃんおばあちゃんだっているんだから、って言って。だから絶対そんなことないからって言って。まあ、すごい推してくれてるんで。それでやってみたっていうのが最初。

——そこから何年ぐらいやられています。

えっとね、小江戸らぐを作ったのは二〇〇二年なんですけど。初めてコミケに出したのは、二〇〇三年だったかな。

——もう、じゃあ最初の方から。

でも最初ね、印刷会社に頼むんじゃないって。あの、キンコーズってコピー屋さんあるじゃないですか。そのキンコーズに原稿を持ってって、コピーしてもらって。コピーを、ロの字に並べて、ぐるぐるぐるぐる回って、真ん中をホッチキスで留めて。帯

っていうか、そのホッチキスが取れないように、帯のシールを入れてみたいな。最初そうでしたよ。

——手作業で実際作られて。

で、結構出ちゃうんですよ。みんな、そういう技術同人誌に飢えてた頃なんです。これは手作り追いつかないって。じゃあ、結構ギャンブルなんですけど、印刷所に一回出してみるって言って、出したら、なんとかうまくいって。

で、当時はまだまだ、僕も勢いがあつたんで。そのLinuxUSERに、ちゃんとおまけのCD-ROMを焼いて付けて。みんな、CD-Rを焼くシステムを持ってるPCを持ち寄って、みんな焼いてたんです。焼いて、一人がプリンターでラベルを印刷して、っていう。そういうことやってました。

——すごい。

そういうの、集まるの、楽しいじゃないですか。そういうことやってましたね。

——そういった勉強会なんですけど、形式ばらないようなことをやられてらっしゃってっていうところがあった。そういうところでコミュニティでやられてるところがありつつ、お仕事のほうでもオープンソースってなると、また、ちょっと変わってくるっていうところは、やっぱりあるんですか。

そうですね。仕事は仕事でちゃんと。僕は、その、Linuxが普通の仕事の中で、っていうよりも、オープンソースがいろいろなところで入っていかないと。当時はDXなんていう言葉なかったですけども、当時は電子化ですね。電子化が進まないんで。

ちょうど二〇〇〇年過ぎぐらいから、Eバブルが確か弾けるんですよ。で、だから、そのEに対しての神話が崩れて、入れただけだったら何もならない、Eの投資はしない、っていう風潮が激しい。そんな状態。でも、やっぱり電子化、必須じゃないですか。効率の悪い仕事の仕方がいっぱいあって、今以上にね。

で、それで、当時の僕の、一番最初働いてきた思いなんですけれども。試すことさえできない、企業で試すことができないっていうのがあるんだったら、試せるオープンソースをいろいろ用意して使ってもらおう。で、その普及活動っていうのかな、促進活動っていうのは並行して進めてました。

ただね、オープンソースの事業っていうのは、僕、最初、立ち上げからやってましたけれども。中でずっとそればかりやってたんじゃなくて、やっぱりどんどんどんどん移るんですね。未踏なんかもありましたし、ソフトウェアエンジニアリングセンターもやったし。それから、民主党政権の頃って仕分けとかあって。その頃は、仕分けにどう対応するかっていう担当にもなったし。

えっと、会社では、本当は僕、オープンソースみたいなものにつ
つと関わりたかったんですけど、関わらせてもらえませんでした。
た。

——そうだったんですか。

逆に。そうなんです。そこは、辛かったですね。いや、その
仕事の辛さを、コミュニティ活動で逃げてたっていうところはあ
ります。月一でね、必ずそのコミュニティ活動はあるんで。

——どちらも同じ思いなんですけど、っていうところで、コミュ
ニティのほうでやれることっていう形でやってらっしゃる。

で、コミュニティのことで知った知見を、そのオープンソース
やってる人たちに、世間ではこうなんだよって言って。あの、
IPAはやっぱり役所なんで、そういうことを自ら進んでやるって
いう人、ほとんどいないんですよ。だから、そういうことをやって
ました、僕は。

——今まで二十年三十年近く、オープンソースにお仕事もコミュ
ニティも含めやられてらっしゃると思うんですけど。どちらの側
面でも、そういった活動をずっと続けていくっていうことをやって
らっしゃる上で、続けるのが難しくなった時とか、これは課題
だったのを感じたりとかした時って、何かしらあったりって
いうのは。

そう、あの、基本、なんで続けてこられたかっていうのは。そ
れは、楽しかったから。それは明確なんです。楽しかったか
ら。

それと、何かをアウトプットを出すっていうのは、結構な喜び
なんで。それは、LinuxUSERであったり、日々の発表であつた
り。イベントドリブンなことがいろいろできるんで、OSCでみん
なに会ったりとか。それは楽しいですね。

ただ、やっぱり、辞めたいって思ったことは、なかったって言
うと嘘になります。何回かありました。

——そうなんです。ね。

やっぱり、コミュニティをやっていると、その。僕は、なんか誤
解を招く言い方なんですけど、他人に期待しない、っていうのを
モットーにしてるんですよ。他人に期待するんだったら、自分に
期待してできることやりましょうっていう。

だから、そうなんですけど、ほかの人たちは結構、他人に期待
する。他人ってのは僕のことですね。こうしたほうがいいよ、こ
うすべきだ、なんでこれやらないの、っていう人がすごく多くな
って。そこでですね、そうだそうだっていう人もいるわけですよ
ね。エコーチェンバーで。

それがあまりに激しくなってくると。まあ、理想は分かるんで
すよ。で、それがあなたの理想だっていうのは分かるんだけど

も、だったら、それはあなたがやればいいでしょ。じゃあ僕は他のところで自分でやるからいいよって。話になります。それが何回ありました。

——やっぱりコミュニティとかでやってらっしゃると、そういうところが起きてしまうっていうところがあるってことですかね。

そうですね。これ、きついですね、やっぱり。

——難しいですよ。組織でやっていくってなると、いわゆる目標という形じゃなく、学んでいくっていうところだと、確かにそういうことが起きてしまうと難しいのになっていうのは、今聞いて思いました。

これ、きついですね。なんか嫌なことが走馬灯のように。

——すいません、なんか嫌なことを出してしまっただけ。っていうのもありつつも、最終的には楽しいというところで乗り越える、ではないですけど。

そうですね。楽しいっていうところが一番でしょうね。

——そういう活動をするのは、やっぱり人との関わり方とか、関わっていくってところがやっぱりあって。そこがいろいろ

ろ、良いところだったり悪いところだったり、変わってくるって感じなんですかね。

そう、それはね、日本だけじゃなくて、ワールドワイドでそれができるっていいと思いますよ。いろいろな文化も違うし、っていうのはやっぱり味わえる。っていうのは、オープンソース活動の醍醐味だと思いますね。

——それと言うと、私は、こういうオフな活動があると知る前は、本当にコードだけのやり取りなんじゃないかって思ってたしたりんですけど。実際いろいろ話を伺うと、やっぱり人との関わりとか、そういうところが重要なんじゃないかって。

実際にコードを書いてない人も結構多いですし。海外で行くと、アメリカのオープンソース活動っていうのは、もう完全に、マネージングの勉強をするような感じですよ。

僕、あの、結構感動したのは。インドネシアが、まだ全然お金がない頃、二十年ぐらい前に、日本のJICAが、産業が全然、農業以外育っていない、インドネシアのジョグジャカルタっていうところに。Windowsを買うお金も満足にないんで、Linux導入の支援をしたんですよ。これがもう、バカ当たりして、今、ちゃんとソフトウェア産業が育ってるんですね。

これはちょっと調べるとね、ジョグジャカルタ、Linuxって出てくるんじゃないのかな。JICAかね。それとね。

——出てきました。Linux じゃないですけど、一応ありますね。ジヨグジャカルタ特別州 ICT 活用教育質向上事業、みたいな形で。

そうそうそうそう。多分これなんだと思うんですよ。でも、これ、今（写真に写っているパソコン）Apple だよな。

——そうなんですよ、ちょっとパソコンが。でも、ちょっと古いパソコンも使ってるので、それが Linux 入ってるのかなと見ながら思いつつ。

すごいのは、やっぱり、ネット環境さえ改善されると。インドネシアでも、それこそ、世界最貧国の一つのバングラデシュだって、同じ環境で戦えるんですよ。それ、すごいと思いません。あとは、だからその、技術さえあれば。逆に、バングラデシュが一番有利になるわけ。コストが一番安いから。そうすると、貧乏から抜けるわけじゃないですか。そこにあぐらかいてる、多分先進国、日本も含まれると思いますけど、きついけどね。

——ワールドワイドでいろんな、活用のしがいがあるというか、オープンソース活動って幅広いってところがあるのかって。

そうそう。あの、IPA を職員として退職した後に、二年ほど委員をやらせてもらったんですけど。その時に、結構やっぱり、世界のオープンソースっていうのを調べてほしい、オープンソース

政策というものを調べてほしいって、調べてたんですけども。まあ、オープンソースをうまく自国の情報政策に活用してるんですよ。日本が一番活用してないんじゃないかな。先進国の中でも。

でも、僕、それは逆説的な意味で、これからもっと利用すれば、今の状態から大きく改善できる、っていうことじゃないですか。これをすごい期待してます。

——近年の潮流、最近の文化とか、最近の流れっていうのをどういうふうに捉えてらっしゃるのかな、っていう。技術であったりとか、オープンソースの流れであったりとか、結構いろいろ変わってきてると思うんですけど。

サーバー環境っていうか、クラウド環境はもう Linux 当たり前なんです。クラウドっていうか、仮想環境っていう形は当たり前。でも、それは一部の人がそう思ってるだけで、多くの一般ピープルとか、サーバーのインフラの人以外は全く知らない。

それをどうするかですよ。意識しないっていうのはすごくいいことなんだけど、意識しなさすぎるだろうと。だって、そもそも日本のあらゆるシステムが Windows と Mac 前提。Mac もやっぱりそうでもないけど、Mac もなかったり、Windows 前提で作られていますよね。

それはなんか、ちょっとその、デジタル赤字で、デジタル貿易不均衡とか言っているのに、あの、日本政府からしてどうなの、っていう感じは、すごく大いに不満です。むしろくちや不満です。

——それで言うと、Linuxとかがちゃんと使われるっていうところが、やっぱりあってほしいっていう感じですか。

僕が生きている間に、そういうのが徐々に当たり前になるような世界になるといいですね。

この間笑ったのは。Linux ってわけじゃないんですけど、あの、僕が行ってる専門学校が、Google Workspaceを導入してて。で、Google WorkspaceにClassroom っていうアプリケーションがあって、これ全部、その教材から課題、テストまで全部一律管理できるんですよ。

で、この間、その成績表を出してくださいって、Excel が送られてきましたからね。なんでやねんって。そこなんですよ。もう、想像づくに、前からExcel で使っていました。で、Google Workspace を導入しました。ただ、あの、Excel とオフィスがずいぶん安く使えるから。ただ、やり方は変えない。

これが日本の DX の現状ですよ。

——確かにそうですね。ちぐはぐなところは否めないですよ。

そうそうそう。おかしいと思わないっていうか、多分、忙しさにかこつけてる理由で、変えられないんだと思うんですよ。

——確かに。それで言うと、私たちも情報学部なんですけど、結構モダンな技術、それこそ AI だったり何とかも、使い方とかも微妙に先生によってブレたりとか。いまだに、Word を使うのかと思いきや Linux 使ったりとか、結構ブレはいっぱいあったりします。

あの、うちのその専門学校でも、AI 禁止っていう人いますからね。いや、じゃあ AI を禁止するんじゃなくて、AI を使ってもいいから、それを鵜呑みに出したやつはぜひ落とすぞっていう話にしないとだめでしょって。社会に出たら AI 使うのも大前提じゃないですか。

そういうふうな環境の中で、じゃあ AI のどういう使い方をしなくちゃいけないのかとか、効率的なことはどうするのか、確認はどうするのか、みたいな話っていうものを教えるべきなのに。コードは手で打たないと覚ええない、と。手で打つコードなんて、今、時代、ないない。

——難しいですよ。私のところも、テストはコード手打ちでやっぱやらないと、っていう人もいれば、もうどんどん使っちゃってもいいよっていう人もいます。特に生成 AI に関しては、考

えてらっしゃることがバラバラで、難しいなっているのは感じます。

僕、全部デジタルで課題なんか出してるんですけど。困るのが、僕が教えたことより高度なコードを書いてきて、しかも動いちやう。で、分かっているのかなあ、分かってないのかなっていうね。

——難しいですね。

そうそうそう。それはね、だから、一個だけ答えさせるんじゃないくて、総合的に判断する形にしていますね。

でも結局、僕、今 Linux の授業を教えてるんですけど。Linux なんて、やっぱり僕が接したように、Linux に接することが楽しいって思ってくれば、僕はゴールだと思ってるんで。そう思っています。

ただね、最近の学生って、すぐ隠れてサッカーゲームするんですよ。スマホで。まあ、専門学校だからね、余計にね。Linux を楽しむのが授業なんで、サッカーゲームを楽しむのが授業じゃないから、それ違うからねっていう話をして。あとで絶対困るからって言うって。そういう話はしています。

——それで言うと、やっぱりどういう技術を使っても、結局ちゃんとそういうところに達してくれればいいのかなっていうところ

が。
あのね、判断する方法と、それから調べる方法。それが身についてくれば僕はいいと思ってる。ほら、二年前は生成 AI のせの字もなかったわけじゃないですか。一年前の生成 AI の使い方と、今の生成 AI の使い方全然違うじゃないですか。

——本当に全然違いますね。

でしょ。だからこれを覚えなさいって言ったら、多分、覚えたのがどんどん陳腐化するだけなんです。だから、こういうふうな探し方をしなさいとか、こういうふうにおかしいと思いなさいとか。そういう、どうしたら、なんて言ったらいいのかなあ。

How みたいなのが、Why とか、その辺を思う力。それと、楽しむね。嫌だなどと思うと思えばないから。その辺を、その教える子たちに学んでほしいなあと思うんですけど。なかなか伝えないっす。

——難しいですね。でも、そういうのがやっぱり今の活動の原点ではないですけど。私も結構 Linux を触って、やっぱり楽しかったのがきっかけで、今これも Ubuntu で、っていう感じで。そ

ういうところが、技術であっても、やっぱり必要というか、大切なことなのかなって考えてらっしゃるっていう感じですか。

僕のクラスね、全員留学生なんですよ。で、しかも、やっぱり貧乏な国から来てる人が多いんで。君たちがこれを持ち帰って会社を起こして国を大きくしていくんだから、って話をするんだけど。伝わらないっすね、やっぱりね。話、大きすぎて。

でもね、教務の人に聞くと、五年以内にほとんどの人が帰ってしまうんだって。日本にエンジニアとして残る人はほとんどいないって言ってましたね。だから、日本で食えるような力があるんだったら、国に帰って会社を起こすし。日本で太刀打ちできないんだったら、やっぱり日本にいられない。いずれにしろ日本にいないって。エンジニアとしてずっと日本で、っていうのはいいんですねって。いないって言ってました。

——じゃあ、もう最終的にはみんな帰られるので、帰った後うまくいってほしいっていうところが。

そう。それだと、日本でその絆っていうのを結んで何とかすると、また違うケミストリーが起こるじゃないですか。それはちょっと楽しみなんですけどね。

——すごい。じゃあ、すごい壮大なことをやってらっしゃる。

いや、本当そうなるか分かりませんよ。

——じゃあ、もう今後もそういうお仕事としては、そういうこともやりつつ、コミュニティとしても、って感じですかね。

そうですね。やっぱり、あの、もうあと、確実に、あと五十年は生きられないんで。死ぬまでに、こういうことはずっと、ライフワークとして続けられたらいいなあと思ってます。結構だから、安い投資でこういうふうな楽しむことができてるんで、いいと思いますね。

——じゃあ、もうこういう感じで将来に向けてっていうか、世代に向けてやるって感じですかね。

そうですね。こうやって若い人たちとコミュニケーションも取れるし。こんな幸せなこと、あるのかと思うぐらいですよ。

——ありがとうございます。皆さんいろいろお話を聞いてて、私が本当にインターネットが出る前のことかは分からないので、そういうところからどうされてるのかとかっていうのは、聞けて嬉しいなと思ってます。

そうそう。えっと、僕たちが作っているLinuxUSERっていうのは、その昔ソフトバンクが出してたUNIX USERっていう、見たことあるでしょ。44の大きさのやつ。であれで、後ろにCDが付いてたでしょう、おまけで。あれのオマージュなんです。

——そうなんですね。

そうそうそうそう。だから、いつも、あのDVDをおまけに付けますよって言ってる、付かないっていう。

——いつもここにも「付属するかも」って書いてありますね。

ずっと怒られてるんです、それは。コミケに行くと、やっぱり十人ぐらいに、今回も落ちましたねって。一番最後に作ったのは、やっぱり二〇一五年だったかな。もう二十冊以上落ちてるんです、もうそろそろ本当に作らないと。

あの、作ってもね、今ね、デバイスがないから、みんな読めないのに。

——そう、ドライブもないんですし。今やISOもDVDに収まらなくなってきたりとか。

そうそうそう。だから、あの、収まるやつを探して、専用のものを作ろうと思っていろいろやってるんですけれど、で、時々ハードオフに行って、外付けのDVDドライブがあるとスツと買ってきてしまうっていうね。こういうやつね。

——いいですね。後ろもすごいですね、いろいろ。それこそ本当に。

あ、そうですね。あの、かみさんに怒られています。

——でも私も分かります。ハードオフに行ったら何かしら。今、手元にこれ、DVDドライブ置いてありました。こんな感じで、僕ももう三つ目とかなんですけど。

楽しいですよ。あの、細いやつも買って。今ね、だから三百円とか五百円で買えるからね。安いですよね。動けばラッキーだもんね。動かなくても、ちょっと分解して磨くと動き出したりとかね。これ、楽しいんですよ。

——楽しいですね。こういう楽しみもありながら、じゃあ、もうちょっと、次のはぜひDVDを。

そうそう、そうですね。よろしくお願いします。

——いただいたやつも、LinuxUSERをもう一回たくさん読ませていただきます。サークルの。

ないのって、何年以降はないとかあるの。

——多分、いただいたのの一番古いのより前は持ってないですね、私たちも。

一番古いの、どれ。

——ちょっと今この場にないんですけど。五冊いただいて、六冊目七冊目ぐらい、二、三冊ぐらい前のがあって。多分、二三年ぐらいまではいただいたかなと思ってます。

なるほど、分かりました。じゃあ、ちょっと探してみます。

——ありがとうございます。サークルのところに置いてあるので、三十人ぐらいいるんですけど、OSCに行く人とか二、三人が、今、楽しく読ませてもらって。本当にすごい、ありがとうございます。

えっと、願わくば、願わくばですよ。今、東海道らぐって言うんで、名古屋の人と神奈川の人と、それから、静岡の人もいるんですけども、っていう感じで作ってるんで。その若い人を集めて、例えば静岡大学の人たちが中心になって、静岡らぐっていうのを作って。で、それで、年に二回、コミックマーケットで会って、元氣でしたっていう挨拶をするような、ことになれば、僕はとても幸せです。

——ちょっと今月も小江戸らぐに行きたかったんですけど、ちょっと別の用事がかぶって。ぜひ来月からちょっと行かせていただきたい。

はい。来月、オンラインですけど。

——そうなんですね。じゃあちょっとぜひ。っていう感じで、僕たちも一応、実はコミックマーケットに今年出そうかなと思ってまして。サークルがあって、そのサークル自体で出そうっていう話をしてまして。多分、同人ソフトで出されてるところに出そうっていうことで、いろいろやっておりまして。

ぜひぜひ。あ、そうそう。あの、大学で出してる方も何人かいらっしゃいますよね。

——そうですね。先輩とかも出されて、っていうことで、今度サークルで出そうという話になって。なので、もしかすると一緒にするかなと思いつつ。ぜひよろしくお願いします。すいません、ありがとうございます、長い間。お話いただいて、本もいただいて、本当にありがとうございます。

そうですね。楽しみにしています。はい、ありがとうございます。よろしくお願いします。

語注

FM-8 富士通が一九八一年に発売した八ビットのパソコン。

PC-98 日本電気が一九八二年に発売したPC-9801とその後継機。国内の事実上の標準となり、エプソンが互換機を出していた。

BASIC 初期のパソコンに標準で載っていたプログラミング言語。

メインフレーム 企業や大学が共同で使う大型の計算機。端末から順番に使う。

Fortran 科学技術計算に使われてきたプログラミング言語。一九五七年公開。

BSD カリフォルニア大学バークレー校で作られたUNIX系のOS。BSD4.2は一九八三年、BSD/386は一九九二年。

2c FORTRANで書いたプログラムをC言語に変換するツール。

リチャード・ストールマン 一九八三年にGNUプロジェクトを始めた人。ソフトウェアを自由に使い、調べ、変えられる状態を守ろうとした。

Solaris サン・マイクロシステムズが売っていた商用のUNIX。

Walnut Creek CDROM 一九九一年設立。フリーソフトウェアをCD-ROMに詰めて売っていたベイエリアの会社。のちにFreeBSDの開発を支えた。

Yggdrasil 一九九二年十二月に最初の版が出たLinuxディストリビューション。バークレーのAdam J. Richterが作り、CD-ROMから直接起動できる最初のものだった。名は北欧神話の世界樹による。

X UNIX系のOSで画面を描くための仕組み。X Window System。

10BASE-T 電話線に似た端子で、機器を一台ずつ集線装置につなぐ方式。それ以前は一本の同軸ケーブルに機器を数珠つなぎにしており、どこかが抜けると全体が止まった。

パスコ 航空測量と地図の会社。同じ読みの製パン会社とは別。

GIS 地理情報システム。地図の上に情報を重ねて扱う仕組み。

Tokyo Linux Users Group 一九九四年発足。日本にいる英語話者が中心で、集まりも英語で行われた。

BBS 電話回線をつなぐ会員制の掲示板。パソコン通信ともいう。

日経 MIX 日経マグロウヒル（現・日経BP）が一九八七年九月に始めたBBS。一九九七年十月に終了した。

ネットニュース 大学や研究機関のサーバーが記事を順ぐりに配り合う、掲示板に似た仕組み。

IPA 情報処理推進機構。経済産業省が所管する。

オープンソースソフトウェア事業 IPAが二〇〇三年度から行った「オープンソースソフトウェア活用基盤整備事業」。二〇〇九年の事業仕分け以降、オープンソース関連の事業は行われていない。

未踏 IPAが若手の開発者に開発費を出す制度。年齢の上限を設けた「未踏ユース」があった。

Jim、Anthy Linuxで日本語を入力するためのソフトウェア。Jimが入力の枠組み、Anthyがかな漢字変換を担う。

小江戸らぐ 二〇〇二年八月、語り手がLinux Usersのメーリングリストに呼びかけて始まった。川越を中心に、月に一度集まる。

compass 勉強会の告知と参加登録を行うウェブサービス。

YUUG 横浜Linux Users Group。カーネル読書会で知られる。

LinuxUSER 小江戸らぐの活動報告集。年一回、「コミックマーケットで頒布している」。

UNIX USER ソフトバンクが一九九二年に創刊した雑誌。付録のCD-ROMに各種のOSが収められていた。二〇〇五年に『オープンソースマガジン』と改称し、二〇〇七年一月号で休刊。

キンコーズ コピーや製本を扱う店。同人誌の印刷に使われてきた。

ソフトウェアエンジニアリングセンター IPAに置かれていた組織。ソフトウェア開発の手法や品質の研究を行った。

事業仕分け 二〇〇九年、民主党政権下で行われた予算の公開見直し。

JICA 国際協力機構。政府開発援助を実施する。

ジョグジャカルタ特別州(一)活用教育質向上事業 聞き手がその場で検索して
見つけ、チャットに貼ったもの。語り手が話している支援と同じものは、こ
の場では確かめられていない。

OSC オープンソースカンファレンス。第六篇の語り手が二〇〇四年に始めた。
東海道らぐ 名古屋・静岡・神奈川の参加者で開いている勉強会。

奥付

本書は、情報通信研究機構（NICT）が主催する SecHack365 の、二〇二六年度融合駆動コースにおける活動として編んだものである。

本書に収める各篇は、クリエイティブ・コモンズ表示・改変禁止四・〇国際（CC BY-ND 4.0）のもとで公開する。出典を示せば誰でも自由に使えるが、書き換えたものを配ることはできない。

これに加えて、各篇の語り手および編者は、原文の趣旨を損なわない範囲で本文を翻訳し、その翻訳版を公開・配布することを許諾する。その際は、翻訳であることと翻訳者名を示すこと。

第一篇

2026年7月15日 オンライン 57分39秒

第二篇

2026年7月17日 オンライン 46分20秒

第三篇

2026年7月23日 オンライン 51分47秒（冒頭欠）

第四篇

2026年7月18日 オンライン 56分24秒

第五篇

2026年8月1日 対面 40分47秒

第六篇

2026年8月24日 オンライン 63分

第七篇

2026年8月26日 オンライン 43分32秒

第八篇

2026年8月27日 オンライン 61分33秒

第九篇

2026年9月2日 オンライン 50分16秒

第十篇

2026年9月5日 オンライン 76分07秒

第十一篇

2026年9月9日 オンライン 49分03秒

第十二篇

2026年9月9日 オンライン 45分26秒

第十三篇

2026年9月10日 オンライン 54分37秒

第十四篇

2026年9月20日 オンライン 55分03秒

第十五篇

2026年9月23日 オンライン 72分22秒

第十六篇

2026年9月27日 オンライン 53分21秒

第十七篇

2026年9月30日 オンライン 88分47秒

第十八篇

2026年10月5日 オンライン 68分47秒

第十九篇

2026年10月6日 オンライン 56分00秒

聞き手・編

大川貴久

書名

OSSの生活史 第一集

編・発行

大川貴久

連絡先

okawa.takahisa.25@shizuoka.ac.jp

発行日

2026年9月10日